

司式:大谷 昌恵
奏楽:中井喜久子

前奏:「イエス・キリストよ、あなただけが最高です」(F. クーラン)

招詞:わたしは、天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。(ヨハ6.51b)

讚美歌:こどもさんびか 2(『21』205「今日は光が」)

交読詩編 96. 1-3

- 01 新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。
- 02 主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。
- 03 国々に主の栄光を語り伝えよ/諸国の民にその驚くべき御業を。

朗読聖書:マルコによる福音書 3. 1-6

◆手の萎えた人をいやす

- 01 イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。
- 02 人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。
- 03 イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。
- 04 そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。
- 05 そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。
- 06 ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

祈禱

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。主日の今日も、あなたは私たち一人ひとりに新しい命を与え、礼拝をお献げするために、御前へと呼び集めてくださいました。ありがとうございます。この礼拝堂で、あるいは配信を通して、今、あなたに賛美とお祈りをお献げできることを心から感謝致します。

特に本日は秋の全体礼拝として、大人も子供も一緒に礼拝をお献げしています。信濃町教会に連なる肢の全てが同じ場所に集い、共にあなたを礼拝できることは、私たちにとって大きな喜びであり幸いです。どうか神さまが今日の礼拝を特別に祝福してくださいますようにと願います。また今日はこの礼拝の後、全体交流会の時間が持たれます。短い時間ではありますが、この教会に集う群れがお互いを知る良い機会になればと思います。この全体交流会の場にもあなたも居てくださって、共に主に従うことの喜びを分かち合う者に、大きなお恵みを注いでくださいますようにと祈ります。

神さま、私たちは日々食べる物や着る物に困ることもなく、何不自由のない生活していますが、世界中を見渡せば、今も、国と国との戦いに巻き込まれ、命の危険を感じている大人や子供がたくさんいます。どうか、そのような争いが、一日も早く終わりを迎え、あなたが造ってくださったこの地球上に、平和な日々が訪れますようにと切に願います。世界中の誰一人欠けることなく、あなたが与えてくださるお恵みに与えることができますようにお導きください。

今日、この礼拝に来たいと思っけていても、来ることが叶わなかった大人

や子供たちがいます。歳を重ねて思うように動くことができなくなった方、心や体に疲れを感じている方、そのような人々の傍に付き添っている方、その他、様々な事情で礼拝をお休みした方の上にも、今ここに居る私たちと同じお恵みと祝福とが与えられますようにと祈ります。そして、また、一緒に礼拝をお献げすることができる日が来ますように、神さまがそれまでの日々の歩みをお守りください。

今日は、山本典子さんと佃雅之牧師が、神さまの御言葉を私たちに伝えてくださいます。どうぞ、このお二人の上に、聖霊を豊かに注ぎ、あなたから与えられた御言葉を思う存分に語ることができるよう、お導きください。聞く私たちの心を開き、しっかりと御言葉を聞くことができますように私たちを整えてください。

今日、日本中、世界中で献げられる全ての礼拝の上に、あなたからの豊かな祝福がありますように。

このお祈りをイエスさまのお名前を通して御前にお献げを致します。アーメン。

賛美: こどもさんびか 49(『21』194「神さまは そのひとり子を」)

子どもへの説教「手を のばしなさい」 山本典子

今日は、最初に皆さんへ二つの質問をしたいと思います。

一つは、「皆さんがイエスさまのお顔を思い浮かべるとき、その表情はどんな時が多いですか?」 “ニコニコしていますか?” “メロ・メロはしてないかな?” “穏やかに微笑んでいらっしゃる顔でしょうか?” それとも、“苦しむ人を憐れむような顔でしょうか?” 今日、聖書の中でイエスさまは怒っています。そして悲しんでいます。どうしてでしょう。後で一緒に考えてみましょう。

もう一つ質問をします。今日の聖書の中に「かたくなな心」とありましたけれども、皆さんは、“かたくなな心”になったことがありますか? “かたくな”という言葉はちょっと難しいかもしれませんが、「頑固」という意味に近いと思います。「かたくな」という言葉を辞書で引いてみると、「ほかの人に構わず、自分の意見や態度を、意地を張って変えないこと」とありました。“うーん、そういうことはありませんか?” 私は“時々あるかな”と思います。この「かたくなな心」こそが、イエスさまを悲しませたんです。

では、改めてこの二つのことについて聖書から聞きたいと思います。

イエスさまは、お弟子さんたちと一緒に、ガリラヤ地方で人々に福音を宣べ伝えながら、病気を癒したり、悪霊を追い出したりしていました。そんな、或る安息日の出来事です。登場人物は、イエスさまと「片手の萎えた人」と、それを見物していた人たちです。この「片手の萎えた人」の「萎えた」というのは、“弱っている”という意味なので、この人はある時から、片方の手どちらかが、思うように使えなくなってしまったんでしょう。多分、こう固く曲がったままで、自由に伸ばしたり曲げたりできなくなってしまったんだと思います。そんな人が教会堂に座っていました。実は、私が少し前に左の手首を骨折したことがあるんです。私は利き手が右手なんですけれども、それでも、左手が使えないと、それまで何気なくできていた動作ができなくてとても困りました。ペットボトルの蓋が固いと、抑える手がないと開けることができないので、お仕事をしているところで、もう大先輩の人に“すみません、開けていただけますか?” とお願いしたりしていました。そのように私はいろいろな人に助けってもらいました。でも、このイエスさま

が出会った教会堂に座っていた「片手の萎えた人」、どうも一人で居るようですよ、ですから、助けてくれる人もいなかったかもしれません。イエスさまは、まずこの人を見つけて “あっ、元どおりにしてあげたい”、と思ったことでしょう。

そして次に、少し、きつと離れた所で、こちらの様子を伺っている人たちを見つけました。そして、その人たちの心を見抜いたんです。この人たちは、「ファリサイ派の人たち」で、律法の細かいルールをきちと守ることを、とても大事にしていた人たちでした。でもイエスさまはこれまでも律法の細かいルールからちょっとはみ出した活動をしていたので、“きつと今日この人は『安息日の仕事はお休み』というルールを守らないで、癒しの業をするに違いない。もし癒しの業をしたら、もう我慢ならないから裁判所に訴えよう”と、そんなふうに思っていたんです。この人たちの予想は的中しました。

イエスさまは癒しの業をしようとします。“片手の萎えた人、真ん中に来なさい”と呼ばれます。この人は、ちょっとびっくりしたかもしれませんね。イエスさまの噂ぐらいは聞いていたでしょうけれども、まさかこの日、イエスさまが教会堂に現れて、そして、隅っこに座っていた自分呼んで真ん中に立たせるなんて、“いったい何がどうしてしまったんだろう”と思ったかもしれません。でもきつとイエスさまの包み込むような不思議な力に導かれて、気がついたら、イエスさまと一緒に教会堂の真ん中に立っていました。

ここでイエスさまは、ファリサイ派の人たちの心の中を見抜いて質問します。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。命を守ることですか、それとも殺すことですか。」皆さんがファリサイ派の人たちだったら、どんな風に答えるでしょう。“善を行うことや命を守ることが大事なのは分かっているけれども、安息日を過ぎてから、明日になってからでもいいんじゃないですか”、などと言うかもしれませんね。でも、ここでファリサイ派の人たちは反論もしないで「黙って」しまったんです。口も閉じ、心も閉じてしまいました。もう、心がカチカチに固まってしまいました。

ファリサイ派の人たちは、イエスさまを拒絶しただけではなくて、この片手が不自由になっている人の悲しみや喜びも全く見ようとしていません。イエスさまは自分を拒絶しただけではなくて、このファリサイ派の人が、「片手の萎えた人」のことも見ようとしなかったの、ここにこうシャッターを下ろしてしまったような感じ、このことに先ず怒りを覚えたんだと思います。でも、イエスさまはあきらめなかったんです。そのシャッターをちょっとでも開けられないかなと思って、ファリサイ派の人たちの顔を見ました、一人ひとり。でも、皆下を向いていたり、ちょっと違う方を向いていたりしたんでしょうか、誰一人とも目を合わせることはできませんでした。それで、イエスさまは本当に悲しくなりました。

でもイエスさまはするべき事をします。片手が不自由になっていた人の曲がったままになっていたその「手を伸ばしてみなさい」とおっしゃいました。きつと長い間、固くなっていた手ですけれども、すーっと伸ばすことができました。その人はどんなにかうれしかったことでしょう。手が元通りになっただけじゃなくて、きつと日々の生活や、仕事や、仲間とも、だんだん元どおりになっていくでしょう。

最初に私がした二つ目の質問はこうでした。“皆さんは、かたくなな心になってしまったことはありますか？”。私は“時々あるかなと思います”と言いましたけれども、お話をしているうちに、“いや、結構あるかもしれないな”と思えてきました。そして、その「かたくなな心」になっている時というのは、自分が正

しいと思いつまんでいる時だな、と気がつきました。“私が正しいだもん”、“私は間違っていないもん”、なんか、ありそうですね。

そんなとき、イエスさまがファリサイ派の人たちに語ったように語りかけてくださいます。“あなたは今、善ではなく、悪を行おうとしていませんか？”、“人の心の命を元気にすることではなくて、その元気を失わせてしまうことをしようとしていませんか？”そして、大事なことに気づかせてくださいます。だんだん心が柔らかくなっていきます。そして、イエスさまはこうおっしゃってくださるはず。“あなたの心の手を伸ばしなさい。”私たちは心の手を伸ばして、イエスさまと手をつないでいただいたならば、心が柔らかくなって、心の手を隣の人もつなぐことができます。

今もイエスさまはきつと私たちに一人ひとりにおっしゃってくださっています。“手を伸ばしなさい。”

お祈り致します。

神さま、全体礼拝の時を心から感謝致します。私たちは、心をかたくなにしてしまうことが多いですけれども、あなたが“手を伸ばしなさい”、とイエスさまが語りかけてくださっていることを感謝致します。どうぞ、その招きに応じて、イエスさまと手をつないでいただけるように、私たちをお守りください。

感謝と願いを、尊き主イエス・キリストは聖名を通してお祈り致します。アーメン。

讃美歌：480「新しい時をめざし」

説教「命を守り、人生を生かす」

佃 雅之

今日の箇所は、「安息日」に会堂で起こった出来事を伝えています。ユダヤ人にとっての「安息日」は土曜日でしたが、私たちはイエスさまが十字架の死から甦られた日曜日（安息日）として守っています。曜日は変わっても、「安息日」が全ての労働を止め、神の備えられた安息に与る日であることに変わりはありません。聖書に記された律法には、多くの戒めがありますが、その中でも「安息日」に関する『掟』は特に重んじられていました。神がモーセに与えられた『十戒』には、このように記されています。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。（出 20.8-10a）」労働の全面的な禁止です。「安息日」は、神との関係を回復する日、働きを休むことで、私たちは自分の力ではなく、神の恵みに生かされているという信仰を証しするのです。

さらに出エジプト記にはこのような『戒め』の言葉もあります。「安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である。それを汚す者は必ず死刑に処せられる。だれでもこの日に仕事をする者は、民の中から絶たれる。」（31.14）。この厳しい言葉は、「安息日」が如何に神にとって重要であることを示しています。“安息日を守らない者は殺されても仕方がない”と読めるほど厳しい戒めです。しかし、律法が教えている神の戒めの真意を一言で言えば、「神を愛し、人を愛する」（『最も重要な掟』マコ12.28-31.並行）ことです。「神を愛する」とは、“神を神として崇め、礼拝すること、礼拝こそが神への愛の具体的な顕れ”です。そして、「人を愛する」とは、“隣人の必要に心を止め、思いやりと赦しを以て接すること”です。そこにこそ、“神の御心に適う愛の実践”があります。

ただし、問題になることは、聖書をどう読むか、聖書の言葉をどのよう

に理解して受け取るか、ということになります。この問いは、今の私たちの間でも続いていることです。今日の聖書の箇所は、「安息日」の教えをめぐる、イエスさまとファリサイ派の人々との対立が深まっていく場面です。対立の中心にあったのは、“安息日に何をすることが神の御心に適っているか”、という問いでした。ファリサイ派の人々は、「安息日」の律法を文字通りに守ることを重視し、癒しの行為さえも、働きとして非難しました。“律法を徹底して守り、その教えに従って生きる者だけが、神によって正しい者とされる”、そう確信して疑わなかったのです。

彼らの律法理解は、聖書に記されていることだけに留まりませんでした。ユダヤの長い歴史の中で、律法学者たちが聖書の言葉を解釈し、人々によって積み上げられた多くの規定や教えが存在していました。その規定や教えは律法の戒めに忠実に生きようとした人々の伝統の積み重ねによって膨大な量となって受け継がれていきました。それがいわゆる“口伝律法”と呼ばれるものです。実際の生活では、口伝律法の方が重要視されていきます。その結果、いつの間にか、聖書の言葉よりも人間が語り伝えた言葉の方が、権威を持つようになっていったのです。神の言葉である律法よりも、人の解釈や慣習が重んじられていくようになりました。これは私たちにとっても大切な問いを投げかけています。私たちは、“神の言葉に生きていますか”、“人の言葉に縛られたり、惑わされることは無いでしょうか”。イエスさまは、人間の解釈や慣習によって、いつしかその本質を失い、神の御心から離れてしまった律法に、再び、愛の息を注ぎ込まれます。律法が本来告げていた神の慈しみと憐れみの御心を人々の心の中に取り戻そうとされるのであります。

「イエスさまが会堂にお入りになると、そこに、片手の萎えた人がいた」とあります。会堂に集まっていた人々は、イエスさまが、「片手の萎えた人」を見て、“どうなさるか”に注目していました。手が萎えているのですから、この人の生活が困窮していたことは明らかです。「安息日」には全ての労働が禁じられています。ただし、当時のユダヤの教えでは、“人の命を救うことについては、それは適用されない”という考えもありました。今、イエスさまの前には、片手が萎え、生きる力を失っている人が居る。しかし、今すぐ、命の危険が迫っているわけではない。彼らは、“もし、イエスさまが癒しをなさったら、安息日にはならないことをしている”と、訴えようと考えて、悪意を持って注目しています。この日の会堂は「安息日」でありながら、人間の悪意と憎悪に満ちていました。彼らはイエスさまに冷たい敵意を向けています。ここに人間の罪が描かれています。彼らは体が不自由で困窮の中にある人の命や安全・平安には関心がありません。彼らの関心は、イエスさまの行いが自分たちの律法理解に合っているかどうか、それだけでした。自分たちの基準によってイエスさまを裁こうとしています。

その心を見抜かれたイエスさまは、「手の萎えた人」を、会堂の真ん中に立たせて言われます。「安息日に律法で許されていることは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」「あなたがたは、律法を守ろうとする熱心さのあまり、律法を持つ本来の意味を忘れてはいないか」、「あなたがたは神の愛を見失っているのではないか」と問われたのです。

この問いに、「彼らは黙っていた。」とあります。彼らが「黙っていた」のは、“適切な答えを見出せなかったから”ということではありません。イエスさまが、どのような問いかけをされても、答えるつもりがなかったのです。彼らの関心は、困窮した隣人の癒しではなく、イエスさまを罪に陥れることにある

からです。彼らにとって、イエスさまは排除すべき対象だったのです。彼らは、律法や言い伝えを守ることに心を奪われ、心を頑なにしています。心が頑なであることは罪の状態の顕れです。

聖書で「罪」というのは、「的外れ」を意味する言葉です。“神の思いから、外れてしまう”、それが「罪」なのです。「間違ったことをする、間違った方向に進む」という意味の言葉でもあります。イエスさまは、「人々を見直し」、怒りを覚え、同時に、深く悲しまれました。怒りは、罪への怒りであり、「悲しみ」は、その頑なさのために救いを受け取れない人々への悲しみであったことでしょう。この日、安息日に会堂に集まった人々が、形式や慣習に心を奪われて、本来、律法に示された守るべき命や愛を置き去りにしてしまったからです。

人は律法を守ろうとするとき、どうしても目に見える行動にだけ目が向きます。そして、“こうすればいい”、“あれをしてはいけない”と、自分の正義という枠の中に相手を押し込めようとするのです。しかし、神は、常に、心を見ておられます。目に見える言葉や行為だけを整えても、律法の本質が決して満たされることはありません。そのためにイエスさまは、“神の律法は、人を裁くためにあるのではなく、人を活かすためにある”ということを示されます。律法の目的は、私たちを神の愛と正義に導き、命へと招くことにあるからです。

「安息日」を大切にすることは、信仰生活において欠かすことはできません。しかしそのこと以上に大切なことは、“隣人への愛の業”です。彼らは自分たちが、今、どのような精神的な歪みの中に置かれているのか、自分たちの信仰が血の通わない信仰となっているのかが見えていないのです。

イエスさまは、手の萎えた人に、「手を伸ばしなさい」と言われます。“手を伸ばしなさい”、この言葉は、“わたしを信じなさい”ということです。彼は、イエスさまの言葉に従い、手を伸ばします。すると、「手は元どおりになった」です。ここで、見落としてはならないことは、彼は、手を直してもらった後に伸ばしたのではなく、“イエスさまの言葉に従って手を伸ばした。その結果、癒された。”ということにあります。「救い」というものは、“救われて信じるものではなく、信じることによって救われる”のです。

イエスさまは、「安息日」が人の命を守り、人を活かす日であるということを示されました。けれども、イエスさまの愛の行為は、必ずしも、人から歓迎され、受け入れられたわけではありませんでした。むしろ、その愛が、本物であればあるほど、人の心の奥にある偽りや目を背けたい現実を照らし出してしまうことがあるからです。神の真理が人の心の奥にある偽りや見たくない現実を明るみに出すとき、人はそれに耐えられず、イエスさまを拒み、敵視さえするようになります。

イエスさまの為さることが、律法の枠を超えて、多くの人の常識を揺るがすものであったからこそ、人々は、その愛に戸惑い反発しました。そしてついに、その頑な心は人の命を救うために定められた「安息日」を、人を殺すことを企てる日にしてしまったのです。そのような彼らの、そして私たちの頑なな心を砕き、悔い改めに導くためにイエスさまは十字架の道を歩まれました。罪を犯した私たちではなく、罪を犯していない神の御子が十字架に磔にされたのです。罪人を悔い改めに導くために、全ての人を神の国に導き入れるために、父なる神はそのように定められたのであります。

主に従い行こうとするなら、私たちもまた、主と共に、十字架の道を歩む者とされるのです。十字架へと進まれるイエスさまの背中を追いながら、

主に託された使命に応じて、苦難の中にあっても、人間の敵意や悪意の中に置かれても、神の愛と正義のためにキリストを証し続ける私たちでありたいのです。本当に、私たちが守り、伝え、聴き、従うべきは、今も生きて語られる神の言葉です。このことを知るために、私たちは、今日も、キリストの御体である教会に集められています。

イエスさまが、ご自分の命をかけて病を癒されたのは、「安息日」が命を活かす日であることを示すためでした。私たちもまた、「安息日」に、共に礼拝を献げる者として、隣人の命を支え、共に歩むように招かれています。時が流れて時代が変わろうとも、私たちは変わることなく、正義と愛の神の御心を実行する教会であり続けたいと思います。

お祈りを致します。

恵と憐れみに満ちたる主なる神さま、この朝、御言葉によって、あなたが与えてくださった安息の意味を知る恵みが与えられ感謝致します。

主よ、私たちはしばしば人間の作ったものに惑わされ、それを超えて働かれるあなたの愛を見失ってしまいます。主よ、どうか、そのような私たちに憐れみ、真の自由へと導いてください。この礼拝を通して、私たちが頑なな心を捨てて、新しい一歩を踏み出すことができますように。

この祈りを、私たちの救い主、主イエス・キリストの聖名によってお祈り致します。アーメン。

讚美歌:こどもさんびか 119(『21』507「主に従うことは」)

献金・感謝の讚美歌:65-2「今ささげる」

感謝の祈り:神さま、今日は礼拝に招いてくださってありがとうございます。みことばを感謝いたします。この一週間をイエスさまと共に歩ませてください。このお祈りをイエスさまのお名前をとおしておさげいたします。アーメン・ 主の祈り

派遣:讚美歌 88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)週報訂正;武蔵野家庭会聖書箇所「1サム 11-12 章」、(2)11/16 特別伝道礼拝案内フライヤーの活用要請、(3)教団 2024 年度能登半島地震被災教会会堂等再建支援委員会 “励ましのはがき” 署名の呼びかけ《対象:5 つの教会と 2 つの施設、輪島教会、七尾教会、羽咋教会、羽咋教会富来出張伝道所、魚津教会、七尾幼稚園、羽咋白百合幼稚園》

後奏:「聖なるかな、万軍の主なる神」(F.クーブラン)